



離島振興法とは、我が国の領域、排他的経済水域等の保全、海洋資源の利用、自然環境の保全等に重要な役割を担っている離島について、離島の自立的発展を促進し、島民の生活の安定及び福祉の向上を図り、あわせて国民経済の発展及び国民の利益の増進に寄与することを目的に昭和 28 年に制定された法律です。

とびしま未来 協議会通信

2012.12

第 4 号

とびしま未来協議会
Conference of the Tobishima island future
since 2011.5

TEL: 0234-26-2381

報告と提言 離島振興法の改正を受けて

みんなでつくろう離島振興計画

呉 尚浩（とびしま未来協議会）

離島振興計画 策定までの流れ

島民の皆様におかれましては、八月にはアンケート調査、九月七・八日、十一月十六日には「とびしまの未来を語る会」、また各種ヒアリング調査にご協力いただき心から御礼申し上げます。

島づくりの計画を定める離島振興計画は、全国的に十年に一度策定されますが、今年の六月に離島振興法が改正になり、離島振興計画作成にあたっては、「住民の意見を反映させるための必要な措置を実施」することが明記されるようになりました。先の二〇〇三年の計画づくりの際には調査を実施（酒田市がアンケート調査を実施、公益大がその分析とヒアリング調査を行った）したものの、住民の間で十分議論をしてまとめる機会はありませんでした。

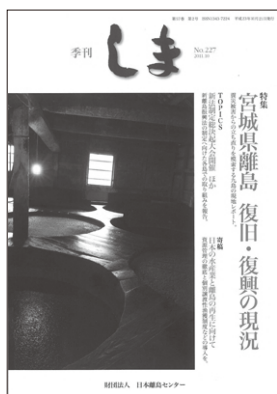
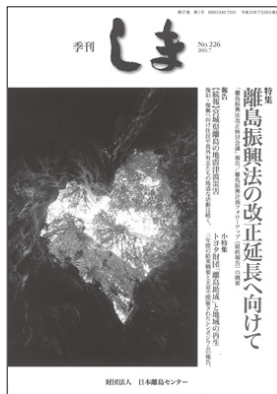
その反省をもとに、今回は協議会と公益大の教員（伊藤、澤邊、呉、岸本、小関）と学生による「とびしま未来研究会」が協働で、島民・帰省者・来島者向けにアンケートおよびヒアリング調査を実施。合わせて島内三地区で「とびしまの未来を語る会」を複数回開催してできた意見を元に基礎資料として報告すると同時に、市や県に対して協議会としても計画に盛り込むべき重要項目を提案しました。今後は、その協議会案を盛り込

んだ形で市の計画案を策定、県との調整を経て、一月末には国交省に事前提出、四月初めには計画策定となります。その間も、随時、島民のみなさんに計画案をお示し、ご意見をいただく予定です。

離島振興計画「協議会案」 はここがポイントです！

ところで、十月末に協議会案として提案した内容のポイントは下記の通りです（詳しくは、四〇五頁の資料をご覧ください。ちなみに、協議会案は、三区長に公益大にお集まりいただき、公益大案のもとに約五時間にわたってご議論いただいた結果のものです）。

◎支え合いの仕組みづくり／専門的コーディネーター「支え合いコーディネーター（仮称）」の島内配置、◎医療／常駐医師の確保を前提とした医療サービスの向上、◎福祉／利用者目線からのセンター内介護環境の見直し・改善、島内外からの入所を可能とする複合拠点施設の新設、各地区での身近な交流拠点（居場所）の設置（自治会館や空き家の活用など）、◎暮らし／島内での買い物の機会の増大（移動販売車の導入）など、◎教育・学校／小・中学校への離島留学制度（空き家の活用・島業と連動した「親子留学」）の検討、◎防災計画づくり、◎漁業振興・Uターン者への漁業就労の促進事業、個人漁業から新しい共同漁業への展開、◎観光／宿泊・飲食施



季刊『しま』

発行：(財) 日本離島センター

第 232 号 特集「離島振興法改正」(2012.9)

法律の概要、成立に至る経緯と立法者の想い、
条文の趣旨概説などを掲載

第 231 号 特集「離島振興への提言Ⅲ」(2012.6)

ロジスティクス、起業・事業創造、
重要国土保全、各視座からの政策論

第 230 号 特集「離島振興への提言Ⅱ」(2012.3)

地元学と生活文化、島の自治、地方財政、
各視座からの政策論

第 229 号 特集「離島振興への提言Ⅰ」(2012.1)

海洋安全保障、沿岸・海洋空間計画、観光振興、
各視座からの政策論

日本離島センター HP「しましまネット」にて一部記事内容を閲覧できます。
インターネット環境のある方はぜひご覧ください。(http://www.nijinet.or.jp/)

また、これらの島づくりを可能にするための「仕組み」「場所」「人」が必要であるため、◎島づくりを推進するための仕組み／「とびしま未来協議会」の充実(島民生活の支援「防災計画づくり、移動販売車の導入、各地区での移動しまカフェなど」、しまカフェ&しまの家(島の玄関を明るく楽しく!、観光・交流拠点、井戸端会議的な島づくりの夢を語る場)、◎拠点施設づくり／「港の拠点」：観光、交流、文化、レクリエーション、「山の拠点」：防災、福祉、文化、森林環境保全などの拠点機

設の充実、観光スポットの整備、漁業との観光の連携による島づくり、◎自然環境保全／海と山の市民ボランティアの活用、休耕地対策(貸し農園の仕組みづくりなど)、◎島づくりを学ぶ場／勉強会・研究会の開催、◎不要品・廃棄物・空き家撤去対策／島外の不要品回収業者の斡旋・支援など、空き屋の利活用の推進、空き屋改修補助、取り壊し・撤収補助などの制度充実、◎飛島の歴史、生活文化の継承と島づくり／島の生活文化(有形・無形)を保管、活用するための複合的施設の建設、島の記憶にもとづく新しい景観・場所、共感と共創の場所づくり、◎総合自然文化体験プログラム／「トビウオ」「トビシマカンゾウ」などをテーマにした、文化、自然環境保全、体験プログラムの開発・活用

能を持つ複合拠点施設の建設、◎しまびと募集／島業(よろずや的に多様な島民の必要に応える)人材の募集、各種協力隊の導入の継続、移住定住促進策の企画・実施などを盛り込みました。

一部離島「飛島」の声を反映させ、新しい施策を活用しよう

また、それらの実施については、新しい離島振興法で創設された、国の新制度「離島活性化交付金」「離島特区制度」を活用していきたいと考えています。

なお、飛島での島づくりの課題や取り組みを、現在国交省がとりまとめている「離島振興基本方針」策定へ活かすために提言する機会もいただいています。全国の離島では一部離島(離島地域で一つの自治体を形成している場合を全域離島と呼ぶのに対し、本土側を含む自治体の中に一部に離島地域がある場合を指す)が多く、住民主体はもちろんのこと、住民の声を聞く仕組みすら持っていない島が多数あります。そういった中で、協議会を設立し、計画案を作成し、合意形成から事業の実施にいたるまでを目指している新しい仕組みとして注目されていることはうれしい限りです。

十年に一度の機会ですので、ぜひとも島民の皆様の意見をお寄せいただけますよう何卒よろしくお願い申し上げます。◎



花壇スダチの冬ごしらえ（上）、
7/9 スダチ苗をお届けしました。（下）



左からスダチ、レモン、不知火（デコポン）

コラム

果樹

のおはなし
File. 1



梅津
智恵



飛島で かんきつは育つ？

山形県最暖の地で始まった栽培実験

かんきつ栽培の 北限を越えて

冬の寒い日は、こたつでミカンを食べながら、ゆつくり…。そんな季節になりました。日本のかんきつの歴史は古く、『古事記』『日本書紀』（八世紀）には橘に関する記述もあります。当時はおもに薬用としてかんきつが用いられていました。その後、中国からミカンが伝わり、十五、六世紀に紀州みかんが盛んに栽培され、明治時代には温州みかんの栽培が本格化。戦後のミカン栽培は飛躍的に伸び、日本でも様々なかんきつが栽培されるようになりました。

かんきつ栽培の北限は、ユズを除いて一般的に関東地方辺りまでと言われています。関東より北方の飛島でかんきつが実れば、観光資源となる可能性もあることから、平成二十二年十月より山形県の産地研究室で、かんきつ類の栽培試験を行っています（酒田市浜中、飛島のごども畑周辺）。不知火（デコポン）、レモン、温州みかん、ユズ、スダチの五種で、強風にも耐えられるように不織布などを巻きながら越冬し、元気に育っています。

お母さん達のご協力を得て 鉢植え栽培が始まりました

今年はスダチの鉢植え栽培試験をお願いしたところ、二十五人のご協力を頂きました。現在、どのスダチも各家

庭でとても可愛がられ、すくすくと育っています。また県水産課の敷地内にある花壇をお借りし、スダチ苗五本を露地植えしました。飛島の厳しい冬を乗り越えて、健やかに成長してほしいと願うばかりです。

さらに観賞用として「しまカフエ」の前に置いた不知火とレモンの結実苗は、夏に島を訪れた人々の目を楽しませてくれました。寒くなってきた十月中旬、マリンプラザの二階間の階段踊り場へ冬越しのために移動しました。不知火は、残念ながら途中で実を落としてしまいましたが、レモンは小さいながらも二つ実り、先日収穫しました。ただ今、マリンプラザの窓口に可愛いレモンたちがお待ちしていますので、近くまで来られた時はぜひ、覗いてみて下さい。

飛島のかんきつ栽培の試みは始まったばかり、いろいろな可能性を持っています。島のお母さん達の優しい手で心を込めて作られた、飛島の風土や文化が香る「ごつつお」に、いつか島で育ったかんきつが、新たな彩りを添えてくれたらいいなあと思っています。

梅津智恵（うめつさとえ）

北海道生まれ。十歳まで道内で過ごし、その後は山形で育つ。庄内の豊かな自然と文化をこよなく愛する。さわやかな青空に悠然とそびえ立つ鳥海山を眺めると、その頂きに立ちたくてウズウズするほどの山好き。趣味は自然散策、美術、音楽鑑賞、料理。家族は夫と私、息子の三人、みんな飛島が大好き！

2012.11.9

4

離島振興計画策定に向

とびしま未来協

＜支え合いの仕組みづくり＞

- 専門的コーディネーター「支え合いコーディネーター（仮称）」の島内配置による総合的な支え合いの地域づくりへ
 - ・ 島民による主体的な支え合いを後方支援 ⇒ 地域福祉の推進
 - ・ 専門性の高い問題への介入、助言（島民主体の活動における限界へのサポート）
 - ・ 島内の介護事業所との連携により高齢者の包括的な支援へ
 - ・ 高齢化による日常生活支援ニーズ拡大に伴う社会資源供給コーディネート（介護事業所で実施する軽度生活支援サービスや緑の協力隊等の活用上の公平性担保）
- ※上記は地域福祉を推進する活動であることから、コーディネーターは社会福祉協議会職員が望ましいと考えられる。

＜医療・福祉＞

【医療】

- 常駐医師の確保
- 医師常駐実現までの医療サービスの質向上により、命が支えられる安心感を
- 1) 遠隔診療の定着による島民の不安解消
- 2) 医師派遣体制の柔軟な対応
- 3) 上記1、2の取り組みが医師常駐実現後も活かされるように

【福祉】

- 利用者目線からのセンター内介護環境の見直し・改善
- 島内外からの入所を可能とする複合拠点施設の新設
- ・ 各地区での身近な交流拠点（居場所）の設置（自治会館や空き家の利活用など）
- （「自宅等の私的な場所」「会館やセンター等の公的な場所」のどちらでもない場所＝「公共の場」をつくる）
- ※ 交流拠点：気軽に足を運べるサロンのような場所。おしゃべりや井戸端会議的な情報交換を可能にする。高齢者の見守り・安否確認、介護予防効果、生きがい創出に寄与することを期待。
- 「支え合いコーディネーター」（支え合いの仕組みづくりで提案）が巡回することで、効率的・効果的な島民のニーズ（必要）把握に貢献できる可能性があり、さらなる信頼関係の構築やその後の島づくりに寄与する。

＜暮らし＞

- 「軽度生活支援事業」
- ・ 「軽度生活支援事業」をより周知し、島内で継続するための環境整備
- 買い物
- ・ 島内での買い物の機会の増大（移動販売車の導入）
- 定期船
- ・ 運賃・運航時間の見直し
- ・ 診療所体制の変化による島外受診増加への補助
- 島内交通
- ・ 通院カーの維持
- ・ 「ボランティア移送」のより一層の周知と継続のための仕組みづくり
- 島内作業道の拡幅・再整備
- ・ 観光客が島内を回れる手段の拡充
- 通信
- ・ 携帯電話・インターネット通信環境の改善

＜教育・学校＞

- 小・中学校への離島留学制度（空き家の活用）
- 小・中学校の維持存続にむけた、学齢期の人口確保
- 島外からの小中学生の総合自然文化体験プログラムの開発・実施

＜とびしま未来協議会＞

- 島民・行政・島の応援団の連携による地域活性化の推進
- 離島振興計画づくりと事業の連携
- しまカフェ&しまの家（島民交流センター）の協議会運営費を確保する
- 拠点、井戸端会議的な島の交流の場の創出
- 広報活動（仙山交流・アサヒ交流）の推進
- 島民生活の支援（防災訓練、移動しまカフェ）
- 全国島づくり情報の収集
- 協議会の事業部門のNPO化

＜拠点施設づくり＞

- 観光、文化、交流、レクリエーション、防災、環境などの要素を持つ複合拠点施設の建設
- 「港の拠点」：観光、交流、文化、レクリエーションなどの拠点機能
- 「山の拠点」：防災、福祉、文化、森林環境保全などの拠点機能
- 二つの拠点をつなぐ海と山、島を巡る動線をつくる。観光、防災、島の環境保全等に活用する。

国の新制度「離島活性化」

＜飛島の歴史、生活文化の継承＞

- 写真・映像等のデジタルアーカイブの作成
- 島の生活文化（有形・無形）の調査・記録
- 記憶回想法など福祉分野での活用
- 島の民俗知を継承する人材の育成
- 島の記憶にもとづく新たな景観の創出

＜総合自然文化体験プログラム＞

- 「トビウオ」「トビシマカン」の活用
- 全、体験プログラムの開発・実施

離島振興計画策定に向けての協議会からの提案

とびしま未来協議会

2012.11.9

<支え合いの仕組みづくり>

- 専門的コーディネーター「支え合いコーディネーター（仮称）」の島内配置による総合的な支え合いの地域づくりへ
 - ・ 島民による主体的な支え合いを後方支援 ⇒ 地域福祉の推進
 - ・ 専門性の高い問題への介入、助言（島民主体の活動における限界へのサポート）
 - ・ 島内の介護事業所との連携により高齢者の包括的な支援へ
 - ・ 高齢化による日常生活支援ニーズ拡大に伴う社会資源供給コーディネーター（介護事業所で実施する軽度生活支援サービスや緑の協力隊等の活用上の公平性担保）
- ※上記は地域福祉を推進する活動であることから、コーディネーターは社会福祉協議会職員が望ましいと考えられる。

<医療・福祉>

- 【医療】
- 常駐医師の確保
 - 医師常駐実現までの医療サービスの質向上により、命が支えられる安心感を
 - 1) 遠隔診療の定着による島民の不安解消
 - 2) 医師派遣体制の柔軟な対応
 - 3) 上記1、2の取り組みが医師常駐実現後も活かされるように
- 【福祉】
- 利用者目線からのセンター内介護環境の見直し・改善
 - 島内外からの入所を可能とする複合拠点施設の新設
 - ・ 各地区での身近な交流拠点（居場所）の設置（自治会館や空き家の利活用など）
 - （「自宅等の私的な場所」「会館やセンター等の公的な場所」のどちらでもない場所＝「公共の場」をつくる）
 - ※ 交流拠点：気軽に足を運べるサロンのような場所。おしゃべりや井戸端会議的な情報交換を可能にする。高齢者の見守り・安否確認、介護予防効果、生きがい創出に寄与することを期待。
 - 「支え合いコーディネーター」（支え合いの仕組みづくりで提案）が巡回することで、効率的・効果的な島民のニーズ（必要）把握に貢献できる可能性があり、さらなる信頼関係の構築やその後の島づくりに寄与する。

<暮らし>

- 「軽度生活支援事業」
- ・ 「軽度生活支援事業」をより周知し、島内で継続するための環境整備
- 買い物
- ・ 島内での買い物の機会の増大（移動販売車の導入）
- 定期船
- ・ 運賃・運航時間の見直し
- ・ 診療所体制の変化による島外受診増加への補助
- 島内交通
- ・ 通院カーの維持
- ・ 「ボランティア移送」のより一層の周知と継続のための仕組みづくり
- 島内作業道の拡幅・再整備
- ・ 観光客が島内を回れる手段の拡充
- 通信
- ・ 携帯電話・インターネット通信環境の改善

<教育・学校>

- 小・中学校への離島留学制度（空き家の利活用・島業と連動した「親子留学」）の検討
- 小・中学校の維持存続にむけた、学齢期児童・生徒をもつ市職員等の派遣推進
- 島外からの小中学生の総合自然文化体験活動の拡充

<とびしま未来協議会>

- 島民・行政・島の応援団（大学・NPO等）の公的な合意形成の場
- 離島振興計画づくりと事業推進
- しまカフェ&しまの家（島の玄関を明るく楽しく！協議会運営費を確保するための収益事業、観光・交流拠点、井戸端会議的な島づくりの夢を語る場）
- 広報活動（仙山交流・アイランダー・HP運営など）
- 島民生活の支援（防災計画づくり、移動販売車プロジェクト、移動しまカフェなど）
- 全国島づくり情報の収集・共有
- 協議会の事業部門のNPO化へ向けての検討

<拠点施設づくり>

- 観光、文化、交流、レクリエーション、防災、福祉などの要素を持つ複合拠点施設の建設
- 「港の拠点」：観光、交流、文化、レクリエーションなどの拠点機能
- 「山の拠点」：防災、福祉、文化、森林環境保全などの拠点機能
- 二つの拠点をつなぐ海と山、島を巡る動線をつくり、観光、防災、島の環境保全等に活用する。

<しまびとと募集>

- 島業（よろずや的に多様な島民の必要に応える）・チャレンジャー募集
- 「協力隊」の継続的導入
- 島の応援団の活用
- 移住定住促進策の企画・実施
- 空き家の利活用
- 情報発信
- インターン募集

国の新制度「離島活性化交付金」「離島特区制度」の活用

<飛島の歴史、生活文化の継承と島づくり>

- 写真・映像等のデジタルアーカイブス
- 島の生活文化（有形・無形）を保管、活用するための複合的施設の建設
- 記憶回想法など福祉分野での活用や展開
- 島の民俗知を継承する人材の育成
- 島の記憶にもとづく新たな景観・場所、共感と共創の場づくり

<総合自然文化体験プログラム>

- 「トビウオ」「トビシマカンゾウ」などをテーマにした、文化、自然環境保全、体験プログラムの開発・活用

<防災計画づくり>

- 避難場所の確保・点検
- 現物備蓄の確保
- 避難経路の整備
- 要援護者の避難支援の仕組み・体制の整備
- 情報収集・伝達
- 地域の防災力の充実と広域的な協力体制の発展

<漁業振興>

- IUターン者への漁業就労の促進事業
- 飛島ブランドの確立
- 個人漁業から新しい共同漁業への展開
- 潜在労働力の活用と6次産業の展開
- 漁業資源の持続的な利用に向けた体制づくりと藻場の保全

漁業との観光の連携による島づくり

<観光振興>

- 宿泊・飲食施設の充実
- 島内散策ルートの再検討
- 観光スポットの施設・環境整備
- おみやげ品開発・販促
- 観光・自然・文化などに関する情報発信
- 島の自然や文化に学び・触れる観光プログラムの開発

<自然環境保全>

- 海と山の市民ボランティアの活用
- 里山保全・島道整備
- 休耕地対策（貸し農園の仕組みづくりなど）
- トビシマカンゾウなどの保全活動の継続推進
- 鳥海国定公園の保全や活用に向けた計画の再検討

<島づくりを学ぶ場>

- 勉強会・研究会の開催
 - ※島づくりの先進事例やテーマごとに講師やゲストを招いたり、島づくりに関わる関係者（島民、行政、NPO、大学、その他）が報告者になるなどして学び合う。
- 三島交流会の継続・活用
- アイランダーの活用

<不要品・廃棄物・空き家撤去対策>

- 「不要品・廃棄物の再資源化構想」島外の不要品回収業者の斡旋・支援など
- 空き屋の利活用の推進
- 空き屋改修補助、取り壊し・撤収補助などの制度充実



レポート① 全国の離島が集まる祭典「アイランダー 2012」in 東京池袋

全国の島の魅力が満載、年に一度の異空間

今年で四度目の
参加となります

十一月二十四日(土)、二十五日(日)に東京の池袋サンシャインシティ文化会館にて「アイランダー2012」が開催され、「とびしま未来協議会」で参加しました。

飛島のアイランダーへの参加は二〇〇九年からで、二〇〇九年、二〇一〇年は「公益大・飛島ふあんくらぶ」が主となって参加し、昨年度からとびしま未来協議会の事業として参加をしています。

アイランダーは、全国の離島から出展者が集まり、それぞれの島の魅力を発信したり、特産品を販売したりする場です。ステージで



「ゆるキャラ」は地方PRの定番手段となりましたね。これは対馬のゆるキャラ「つばきちゃん」。ツシヤママネコのキャラです。

の伝統芸能や歌の発表や、島の民芸品を作ったりできる体験ブースもあります。

ブースの演出は 「等身大の飛島」

今回のアイランダー飛島ブースは、飛島の海と空の青をテーマに緑のふるさと協力隊の松本君が装飾やパネルを作ってくれました。写真をたくさん使ったパネルは見やすく、訪れたお客さんにも好評でした。また「飛島やー飛島幻の天保そばとび魚だしそばつゆ」などの物販に加え、飛島特製バッジやポストカードを作ってPR販売しました。

今回は、おばこ旅館の本間さん、和菓の小川ひかりさんが一緒に参加してくれました。お二人からもご尽力いただき、二日間たくさんのお客さんとじっくりお話をして飛島の魅力を伝えることができましたし、飛島小中学校の同窓会からもご協力を得て、東京に住む飛島小中学校同窓会のメンバーの方が応援にかけつけてくれました。

今後も協議会としてアイランダーへ参加し、飛島を全国にPRしていく予定です。①

林 久美子 (はやしくみこ)

とびしま未来協議会。東北公益文科大学在学中から十年以上、飛島に通っています。

私がみたアイランダー

島民自身が 独自の活路を

今回初めてアイランダーに参加させて頂き、率直に今飛島に何が必要で、何が足りないか考えさせられるイベントでした。どの島々を見ても高齢化や若者の担い手不足、観光客の減少など、飛島と同様の問題を抱えていましたが、島民自身が独自の活路を見いだして取り組んでいる努力を見習うべきだと感じました。

飛島にも他の島に負けない「自然・食・文化」があります。他の島々の取り組みも参考にしつつ、新しい事への挑戦を島民も一緒になつてすべきだと感じました。

(本間 当)

離島留学の取 り組みに共感

今回アイランダーに参加出来たことはとても良い刺激となった。これまで他の島の方々と交流する機会がなかったので、多くのことを学べたと思う。

とくに鹿児島県三島村の取り組み



飛島出身者の方も何人か応援に来てくださいました（写真は澤口さん）。



全国離島のトビウオ製品を購入し、比較しました。比べるとよくわかります。飛島の「焼干し」はテーマの芸術品でした！



この秋から制作をはじめた『飛島絵葉書』も大好評です。わが家の絵葉書も作ってみたいという方ご相談ください。もちろん無料です。

みである「しおかぜ留学」には非常に共感を覚えた。これはいわゆる離島留学のことで、今後飛島においてもぜひ導入したい制度である。お隣の粟島でも離島留学の募集を始めており、飛島もこれに続きたい。

個別ブースでは飛島の様子・活動を紹介し、話を聞いてくださった方には濃い説明が出来たが、「多くのの人に飛島を知ってもらおう」には少し遠かったように感じる。ブースの立地が人目につきにくい場所に当たってしまったのは仕方がないが、もつとたくさんの方に足を止めてもらえるような工夫が必要ではないか。

(小川ひかり)



うみじろう

継承すべき島の原風景を考える



2010年に飼育が始められた粟島馬（上）、釜谷集落に建設された複合交流施設「さっこい交流館」（右上）、しっかり勉強したあとはお楽しみの交流会です（右中）、粟島名物「旗振り見送り」です。粟島の皆さま大変お世話になりました（右下）



むかし、粟島にこの島固有の馬がいた。

源義経が対岸まで乗ってきて、捨てられた馬が泳いで渡ってきたとも、

米沢上杉家の軍馬だともいう。

明治天皇が東北巡幸のさい天覧に供したとも、皇居前の楠木正成の銅像のモデルだともいう。はつきりしたことはわからない。

しかし昭和七年頃、粟島馬は最後の一頭がなくなってしまった。

いま粟島ではその馬に思いを寄せ、新たに馬を育て始めている。それは化石燃料や原子力に頼らない持続可能な地球への提案。

かすかに残る遠い日の馬の記憶…。

そして大正・昭和の人々の暮らし…。

『粟島馬物語 人と暮らし』（二〇二二）冒頭部

*

日本海に浮かぶ飛島・粟島・佐渡。島民が互いの島を知り、交流を深める場として二〇〇七年にスタートした「三島交流会」は今年で六回目の開催となりました。

私が初めて粟島を訪れたのは二〇〇九年の夏でした。島の暮らし、とくに伝統的な土地利用とその変遷について勉強するためでした。粟島では昭和四十年代まで焼畑（カノ）が行われ、また大正時代まで「牧畑」（馬の放牧と畑地の交互利用慣行）

が行われていました。粟島馬に関する研究を進めて近い将来粟島に馬を復活させる、という話もこのときに聞きました。

今回の三島交流会では粟島を周りながらさまざまな島の現状や課題、取り組みが説明されました。島の東海岸の一角には既舎と馬場の建設が進められ、道産子など十数頭の馬の飼育がスタートしていました。冒頭にあげた文章は粟島馬の飼育と活動に取り組む「粟島ドリームランド協議会」が発行した冊子の抜粋です。この冊子には島の十四人の古老の大正・昭和の暮らし、馬に関する記憶が収められていて、大きな興味を誘いました。

小さな自治体が故に自治の機能が果たす役割をしつかりと認識し、生業が失われるとともに徐々に消えていった原風景を取り戻し「ふるさと粟島」次世代に継承する――。

これは交流会二日目の粟島の発表で示された村の基本理念の一節です。漁業の低迷、磯焼け、竹林の荒廃など粟島は飛島と同様さまざまな問題を抱えています。ここには島の原風景を確認しながら、観光、島づくりに主体的に取り組む粟島の堅固な姿勢があります。

現在、日本全体が人口減少と向き合う縮小再生産社会のかたち模索しています。離島にかぎらずこれからの地域社会は、歴史的な出自のちがう多様な主体が折り重なるようにして地域全体の持続性を保つことになるでしょう。「地域の場の歴史と記憶」は、多様な人々が集い、新たな共感と協働を生む原動力のとなるはず。今年のテーマとなった「観光と島づくり」の根となる考えのひとつを確認することができました。

岸本 誠司（きしもとせいじ）

とびしま未来協議会。専門は民俗学、デジタルアーカイブス研究。飛島の住まいは法木のジロインです。